經濟論叢

第八十四巻　第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿
統計学＝社会科学的認識手段論の問題点……大橋隆憲　1
資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの(二)…吉村達次　17
急速税務減価償却をめぐる所得税会計の保守主義……高寺貞男　37
ヘンリ・ジョージについての一考察…北沢康男　55
ソースタイン・ヴェブレンに関する一研究……中山大　68
神戸正雄先生による再保険特約方式の輸入……佐波宣平　85
記事
神戸先生御逝去 ……91
追憶文 ……96
新村出　井藤半弥　本庄栄治郎　小島昌太郎
石川興二　蜷川虎三　大谷政敬　小山田小七
堀江保蔵　島恭彦　松井清

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

恩師神戸先生を悼む

大谷政敬

去る十月十六日の夕方偶然ラジオのスウィチを入れるとやがて七時のニュースが流れてきた。ところが意外にも、先生の御逝去のよしを耳にした。余りの突然の報らせにしばし、棒立ちになった。あるいは間違いではないかと思って家内は放送局に電話で問い合せたが、先生の他界のしらせは確かであった。ああ先生は死なれたのか、この七月廿二日の午後、私が東京よりの帰途、御宅をお訪ねした時は、いつもの温顔と巨軀で出てこられ、奥さんが、少し熱があるのだとおしやったのを耳にして、先生どうかおやすみになって下さいと言って、臥床のまま東京の模様や何やかや御話して、先生もウンウンと御機嫌よく返事され何時もの先生とお変りの点は見受けられなかった。十月には財政学会で上阪しますからまたその時御伺いいたしますと御約束して御別れした。

これが今となっては生前の先生の最後の思い出となってしまったのである。

追憶文

私が大学院で財政学を研究することになって、先生に親しく接するようになったのは、昭和三年三月からであったから、数えると三十余年となる。

先生はどちらかというと無口な方で、そして決してこうせよとは言われなかった。ただ大学院に入って間もなきころ、君の文章はむつかしい、文章なり思想は一応自分で消化して、自分のものとして表現しなければいけないと言われたことがただ一度ある。この一言は胸にこたえ現在にいたるまで、金科玉条としている。先生は黙々として、人間の話を聞かれるのが常であるが、人生の体験は深く、処世についての解決の道に困った時など、常人を超えたほとんど神の心鏡でないと伺えない言葉で訓されたことが二三回あって、いまなお心の灯となっている。

先生の御家柄は神職で私の父も神職の出で、幼年時代は神職の環境に育った関係か、なんとなく先生の風貌に引きつけられる思いがした。

先生には、二男一女の御家族であったが、つぎつぎになくなられた。長男の正一さんは、先生と同じ財政学を研究され、東大の助教授であった当時、さぞ先生は御満足のこととひそかに、御喜びしていたのであったが、戦争はこの正一さんを戦死させた。ただ現在血縁として残された方は、お孫さんの廿七歳の男子があるのみと聞いている。洵に先生の悲しみ断腸の思いであらせられたことと想う。

追憶文

先生は永年京大経済学部で研究と育英にあたられ、経済学部関係者は凡て弟子のような心境でいられたことは私は身をもって体験している。肉親のつぎつぎの御不幸は、ますます経済学部への愛着を増して行かれたことと思う。

奥様の御話しによると、先生の誕生日に京大の先生方々と会食するのが唯一の楽しみであったとのことである。

先生臨終にあたり、もっとも愛着されていた経済学部の人々とのお別れを望まれたことは偶然ではない。

「嗚呼！　先生十月十八日経済学部では盛大な告別式が行われました。私は行けなかったのですが家内が参列いたしました。私は十一月二日お宅で御霊前に御冥福を祈り、奥様から告別式当日のお写真ならびにテープレコードで当時の模様を審らかに伺いました。どうか安らかに永遠の旅路について下さい。合掌。」（三四・一一・六）